

私には他人の心の声を聞くことができる。その人の考えていることが聞こえ、特に私に向けられる声はよく聞こえる。

子供の頃はこれのせいでいろいろと大変だった。心の声が聞こえるせいで気味悪がられたり、自分への悪意を感じ取ったりもした。

高校生の頃にはだいたい精神的に参っていたけれど、今ではなんとかこの力も制御して、自動で相手の心を読んでしまうようなことはなくなった。

（なくなった……はず、なのに……）

二年前に入社した、私が教育係を務めた隣席の中里圭吾くん。仕事は丁寧で早いけれど、物静かで表情もあまり変わらず、ほとんど自分のことを話さないから何を考えているのか分からないと周りでは言われている。

『あー……今日の優梨さん、珍しく髪上げててうなじえろ……』

「っ」

突然聞こえてきた心の声。その声の主はパソコンに向かって営業資料を作っている中里くんのだ。

何故か出会った頃から彼の心の声だけはいくら聞こうとしなくても聞こえてしまう。そしてそのどれもが耳を塞ぎたくなるような恥ずかしいものだった。『優梨さん、肌白いから痕付いたら目立ちそうだよなあ。あー、痕付けまくって泣かしたい……』

彼の言う優梨とは私のことだ。普段は苗字でしか呼ばないくせに、心の中では私のことを名前で呼ぶ。そして私でえっちな妄想をするのだ。

『この前の飲み会の酔った優梨さんもめっちゃえろかったんだよな。距離感近えし、胸押し付けてくるし。二人きりだったら絶対襲ってたな。服ひん剥いて啗えさせてえ。涙目になりながら必死にちっさい口動かして……、……、……えろ』

「……っ、中里くん！」

「はい」

彼の妄想に耐えきれなくなって声を上げる。けれど彼は何事もないかのような表情で私の方を向く。その瞳が静かに私を見据えて思わず言葉に詰まった。

「新名さん？」

「っ、あ……と、その、し、資料！　そう、明日の会議で使う資料できたの！？」

「はい。今ちようどできたところです。データ送るんで確認お願いします」

「え、あ……」

「あと、この前、新名さんが部長から頼まれてたA社に関する商品のデータ、必要項目抜き出してリスト化しておいたんでよかったら使ってください」

「えっ、あ、ありがとう」

「いえ」

そう言ってまた前を向いてしまう中里くん。

静かに黙々と仕事をする彼は傍から見ればどう見ても物静かで淡々と仕事をこなすだけの人に見えるだろう。

『優梨さん声いいよなあ。ちんぽぶち込んだらすげえ可愛い声で泣いてくれそ』

「んぐ……っ」

聞こえてきた声に噎せそうになって慌ててお茶を飲む。

（な、な、なななに考えて……っ）

『っーか、優梨さん身体ちっせえし、俺の入るか……？ 身長差何センチだ？ 結構小さいよな』

「っ」

こんな風に仕事中ずっとこんな妄想が聞こえてきて仕事に集中できない。だからと言ってこんなこと指摘もできない。

『あー……優梨さん、マジ可愛い。許してって泣くくらい、まんこ、ぐっしょぐしょに濡らしてイかせまくってから、ちんぽぶち込んでひんひん泣かせてえ……』

「……っ！」

「新名さん？」

突然勢いよく席を立った私に中里くんがちらりと視線を向ける。その様子からは何を考えていたかなんてとても想像もできなかった。

「ちょ……ちょっと、お茶入れてくるね。な、中里くんもいる？」

「いえ。大丈夫です」

そう言ってまたパソコンに向き直る彼から逃げるように、私は机の上のカップを持って給湯室へ向かう。

誰もいない給湯室で私はお湯を沸かしながらシンクに両手をつく。

「——いや、誰だよ！　なにあれ、二重人格！？」

誰もいないのいい事に私は思わず叫んでいた。

他人に興味無さそうで人付き合いも最低限で、誰かと笑いあっているところも見たことない。

無表情で人付き合いが苦手な中里くん。そんな彼の印象は心の声でがらりと印象が変わる。

（毎日毎日えっちなことばっか考えて……口調だって違うし。だ、だいたいな
んで私……）

彼の頭の中はどうなっているのだろう。今もまだ私でえっちな妄想をしているんだろうか。

「……っ」

ぎゅうっと両手で自分を抱きしめるようにしながらその場にしゃがみ込む。

（中里くんのせいだ……）

ずっとえっちなこと考えてるから、嫌でも想像しちゃう。

（無理やり口に咥えさせられちゃって……苦しいのに、頭掴まれて逃げられなくて……）

えっちな音が響いて、口の中にいっぱい出されちゃう。口の中、熱くて濃いい中里くんの精液でいっぱいになって、ちゃんと全部飲みよって言われて、私はそれに逆らえなくて。

「——って、違う違う！ 私まで何考えてんの……！」

考えを振り払うように頭を振る。

けれど、下着の奥からじわりと熱いものが滲み出すのを感じて、私は膝に顔を埋めた。



その日は必要な資料を探しに資料室にいた。過去年分ものデータを集める必要があったため大変だ。一人でやるとかなり時間はかかってしまうだろう。

（手伝いはありがたい……ありがたい、んだけど……）

『あー……今朝の夢、優梨さんクソえろかったな……』

（いやどんな夢見てんの！？）

資料室には私と中里くんの二人きりだった。作業の音しか聞こえない静かな資料室では中里くんの心の声がよく聞こえてしまう。

『顔ぐっしやぐしやにしながら俺の上で気持ちよさそうに腰振ってんだよな

……、……やべ、思い出したら勃ちそ……』

（あああああつ！ 夢でヤツちやつてるしいい……！）

「新名さん」

「ふあつ！？」　な、ななななに……っ！？」

「？ 探してた資料ありました。これで最後ですよ」

「あ、ほ、本当？ あ、ありがとう。じゃ、じゃあ、あとは私一人で大丈夫だから戻っていいよ」

「重いんで運びます」

「う、ううん！ 大丈夫！ 私これでも力あるから！」

「いや、けど……」

「ほ、本当に大丈夫！ ほら、戻っていいよ。手伝ってくれてありがとう！」
これ以上、こんなところで二人きりでなんていられない。私の態度を訝しむ中里くんを何とか帰そうとすれば彼は「分かりました」と小さく頷いた。

「……あ」

「え？」

資料室を出ていこうとした彼が小さく声を上げる。

「ドア……」

「ドア？」

「開きません」

「……」

「……」

「え、開かない？」

「はい」

（はあああああああ！？　なにそのお約束展開みたいなの！　いらないんですけど、そういうの！　なんで開かないの！？）

「そういうや部長が、資料室のドアの建て付け悪くなって、中から開けれなくなるから閉め切らないよう気をつけろって言ってたような……」

「な……、じゃ、じゃあ誰かに開けてもらおう。えっと、スマホ……は机置いてきちゃった。中里くんは持つてる？」

「俺もないです」

「……、……そう」

（最悪だ……、いや、さすがに性欲の塊みたいな中里くんでも本当に襲ってき

たりはしないだろうけど、でも密室で二人きりとか……」

『……優梨さん困ってんな。さすがに密室で男と二人とか嫌か。しかも俺、結構避けられてるところあるし』

小さく聞こえた心の声に思わず彼を見る。彼はドアの前から動かず私と視線を合わせようもしない。

『まあ、近寄んなきゃ大丈夫……か？』

（気を、使ってくれてる……？）

「とりあえず、俺たちが戻らなかつたら誰か様子見に来てくれるんじゃないですか」

「そ、そうだね」

どこか気まずい空気のまま、沈黙が流れる。

どうしていればいいかも分からず、何気なく窓の外へ視線を向けると外は土砂降りだった。

（やな天気……）

そこから視線を逸らしてまた室内に向ける。中里くんはまだドアの前にいた。
「あ、あのさ、もう少しこっち——」

その時だった。

窓の外が光り、激しい雷音が鳴り響いた。

「ひゃ……っ」

「新名さん……？」

小さく悲鳴を上げた私に中里くんの怪訝な表情が向けられた。

「な、なんでもな——ひゃあっ！」

慌てて誤魔化そうとしたけれど再び鳴った雷の音に思わず蹲った。雷のせい
か明かりが落ちて暗くなる。

雷が苦手だった。子供の頃からずっと苦手だった雷は大人になった今でも苦
手なまま。

（いい歳して雷怖いとか、恥ずかしい……中里くんもきつと呆れてる……）
「……雷、苦手なんですか？」

すぐ近くで声がした。思わず顔を上げると蹲る私の前に膝をついた中里くんが私を見つめている。その距離に驚いて、さらには伸ばされた両手にびっくりと身体を震わせると、その両手は私の両耳を覆った。

(え……)

『雷苦手なら、音とか聞こえなきゃ平気か……と思ったけど、優梨さんすげえ戸惑った表情してる……』

もしかして、雷の音を聞かせないようにしてくれているのだろうか。あまりに突飛な行動に戸惑いを隠せずにいたら中里くんはパッと私の耳から手を離れた。

「すみません。急に変なこ——」

「きゃあ……っ」

雷が鳴る。私は反射的に目の前の中里くんにしがみついていた。

「っ」

中里くんの身体が強張る。けれどそれを気にする余裕はなかった。

「に、いなさん……大丈夫——」

「ッ」

ぎゅうつとしがみつく私に中里くんの言葉が途切れる。

彼はしばらく黙った後、先程のように両手で私の耳を塞いだ。

「あ……」

「これなら少しはマシだと思うんで」

耳を塞がれているせいで声は上手く聞き取れない。けれど彼の優しさは伝わってきた。

（ずるい……いつもえっちなことばっか考えてるくせに……）

けれど、中里くんのおかげでほんの少し怖さが和らいだ。

『か……』

（か……？）

『可愛いすぎんだろ……っ、俺の服掴んでふるふる震えてんのか、涙目とか……！ いや、優梨さん、本気で怖がってんだから変なこと考えんな俺……、

……、……いやけど、ヤバイ。あー……抱きしめてえ……さすがにキモがられるか……俺、多分嫌われてるしな……いつも俺と接する時だけぎこちないし』
無表情のまま心の中が凄いいことになっている。外と中で温度差がありすぎて本当に二重人格なんじゃないかと思ってしまう。

『……まだ震えてんな。……拒否られたら死ぬ……けど、まあ……』

(あ……)

両耳を塞ぐ手にゆっくりと引き寄せられる。そのままぎゅうっと抱きしめられてしまった。

『……拒否、られない……？ いやけど、怖すぎてそんな余裕ないだけの可能性も……』

(……いっつも無表情なまま私でえっちなことばっか妄想してる性欲魔人のくせに……)

本当にもう、その言葉だけ聞いたらとんでもない人だ。けれど、中里くんの腕が温かくて優しいから嫌な気持ちはいらない。

『……あー……、今絶対変なこと考えんな、俺』

(……………?)

『優梨さんの身体めっちゃ柔らかえとか、いい匂いするとか……マジで考えんな、俺』

「っ」

『? 今震えた? 雷は鳴ってねえけど……』

(に、匂い……? なにそれ、やだ……なんか恥ずかしい……っ)

思わず離れたくなるけれど、中里くんの腕の力が強くて動けなかった。

『っーか、やっぱちっせえよなあ。腕ん中すっぽりおさまるし……、はー……優梨さん、マジでいい匂いする……押し倒してえ……』

(っ、な、ななな……っ)

結局いつも通りな彼の心の声に私は思わず身を振る。何だかこのままじゃない気がした。

「? 新名さん?」

「っ」

耳元で声がした。低い静かな声と吐息が耳に触れて身体が震える。

「どうかしまし——」

「ん……っ♡」

再び耳元で声がして、変な声が出てしまった。その瞬間、場が不自然に静まり返る。

（うつ、あつ、あ……っ、あああああつ、ちがうつ、ちがう……変に黙りこまないでえ……!）

『……やっべ、勃った』

（っ、な、ななな……っ、たっ、た……!？ た……っ!？）

『優梨さん、耳弱いのか？ やべ……さつきはわざとじゃなかったけど、もっかいやったら怒られるか……?』

（なっ、ま、またする気——っ）

「——新名さん？」

「んん……っ♡」

吐息を吹き込むように耳元で呼ばれて背筋がゾクゾクする。

『く……、えろ……っ』

中里くんは指で私の耳を触り始める。自分で触れるのとは違うその感覚に逃れようと身を振った。

「な、かざとくん……っ、やめて……！」

「っ」

声を上げるとパッと手を離される。

『やべ……調子乗りすぎ、た……』

慌てたような声。けれど、顔を上げた私を見ると彼は私を見て目を丸くした。その瞬間。

「——んっ!? んん……っ」

気づけば視界いっぱい広がる中里くんの顔。キスされていると気づいたものの、動揺に固まってしまう。

『あああああ！！ やっちまった！ 優梨さん可愛すぎて無意識だった…』

中里くんの心の声が慌てている。

（なのに……表情は変わらず何考えてんのか分かんないし、キスもやめてくんないし……）

私をじっと見つめる瞳に思わず目を閉じて逃れる。

「ふ、あ……♡」

『っ、拒否ら、ない……？ つーか、目え閉じてるし……、……、……』

「んっ、う……♡ んん♡♡」

閉じた唇を舌でノックされて思わず唇が開けばそこから肉厚な舌が入り込んでくる。

「んっ♡ んん……♡」

『あー……やばい……口ちっさ。マジで可愛い。妄想の数百倍可愛い』

「ん、う♡ ん、ふあ♡♡」

『……えっろ』

首裏に回された腕に引き寄せられて、しつこいくらいのキス。呼吸もままならなくて、飲み込めない唾液が口の端から溢れていく。

(なに、このキス……きもち、いい……♡)

唇が離れると互いの唇に唾液の糸が引いて、ぷつりと切れた。

「は、あ……♡」

力が抜けてぐったりと中里くんに寄りかかる。

『ぐ……っ、か、可愛い……い、いやけど落ち着け俺。これ以上はさすがにマズイ。優梨さんに嫌われたら死ぬ。とりあえず優梨さん落ち着くまで待つて……、……腕の中に優梨さんいてこれ以上何もできないとか拷問すぎる……!』
心の中が騒がしすぎる彼は意識しているのかしていないのか、私を抱きしめる腕に力をこめた。

『落ち着け、俺。とりあえず他のこと考えろ……』

(……え)

その瞬間、私の身に不思議なことが起こった。

いつもは聞こえてくるばかりの中里くんの妄想。その彼のイメージが私に流れ込んできた。